



奥村芳松・奥村徳四郎と奥村濟世館

川村 一郎

日本の民間義肢製作創設のルーツは大別すると、創設者自身が下肢切断者であり既存の義足に満足できず自ら義肢製作所を開設した人達と、医療器械販売店等の義肢関連部門から独立した人達とに二分される。

前者には九州一円に大きな影響力を持つ有園製作所の始祖有園政吉（明治30年創設）、東北・北海道に多くの関係会社を持つ田村義肢製作所の創始者、岩手出身の田村耕作（明治35年下腿切断）、又、名古屋松本義肢の松本豊治（明治38年下腿切断）等があげられるが、医療機器の店から独立開業した一つである奥村芳松の奥村濟世館はその養成した門下生が全国に散在し、現在各地を代表する義肢製作所となっている所が多く、巨大ルーツとでも呼ぶことができよう。（文献1）

その創設者奥村芳松（1861：文久3年～1917：大正6年）は広島県三原市の生まれで、士族の出身であると言われているが、明治20年大阪市東区道修町の医療器具商、異医療店に勤務し、明治26年大阪市東区淡路町にて医療器具店を独立開業し、専ら義手足整形器の製作研究に従事した。明治32年に大阪市西区に義肢装具専門店として開業、明治36年に当時の陸軍第4師団軍医部長の命名により「濟世館」を公稱する。明治40年開業当初より指導を受けていた大阪府立高等医学専門学校（現大阪大学医学部）の三宅教授が福岡医科大学（現九州大学医学部）教授に転任されるにあたり、

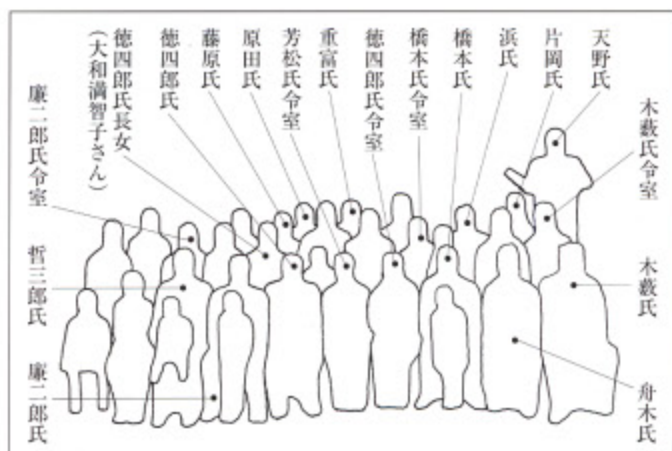
福岡への営業所開設を懇望され福岡濟世館を開設し、家族一同と共に福岡に赴任した。大阪の濟世館本館の経営は義弟土井昇造に一任したが、土井昇造が明治43年に独立開業したため、門下生高島徳四郎を養子として本館である大阪濟世館を継がせた。芳松は大正6年福岡市にて56歳で病没したが、昭和元年、福岡濟世館は経営困難のため閉鎖して大阪本館と合流し、家族も又大阪に移転した。

奥村芳松は清廉潔白で人情に厚く、門下生を愛し、技術面のみならず精神面でも良き指導者であった。いわゆる固いばかりの経営者でなく、芸能をも愛する極めて包容力に富んだ人物であった。そこで全国各地から多くの技術希望者が彼のもとに集まり、又、技術習得後逆に全国各地に散らばって、ある者は独立開業し、ある者は代表的義肢製作所の技術的指導者となった。2代目奥村濟世館主となった奥村徳四郎は昭和3年に旧金沢医科大学（現金沢大学）及び岡山医科大学（現岡山大学）の指定を受け、岡山奥村濟世館及び金沢濟世館を開設した。また同時に、義父芳松の遺志を継ぎ多くの技術者を養成したが、現在も活躍しているこれらの門下生及び、その子弟のつながりを列挙したい。

- 土井昇造 - 土井義肢矯正器専門技術所 - 川村義肢株式会社 (大阪)
- 中元市次 - 中元義肢矯正器技術所 (大阪)
- 垣内治朗 - 垣内義肢製作所 (広島)
- 青木豊吉 - 青木製作所 (東京)
- 高島幸七 - 高島義肢製作所 (福岡)
- 小野二郎 - 小野義肢製作研究所 (福岡)
- 橋本寅之郎 - 岡山濟世館 - 橋本義肢製作株式会社 (岡山)
- 井上安之助 - 株式会社澤村義肢製作所<技師長> (神戸)
- 木萩修吾 - 金沢濟世館 - 山田清一氏に移譲。現在に至る。 (金沢)
- 時吉栄吉 - 株式会社青森日東義肢製作所 (青森)
- 舟木律則 - 株式会社舟木義肢 (岡山)
- 片岡尚二 - 片岡義肢製作所 (香川)
- 重富長太郎 - 重富義肢製作所 (鹿児島)
- 山田清一 - 株式会社濟世館 (金沢)
- 藤原末男 - 岡山濟世館 - 藤原義肢製作所 (広島)



(写真1)





(写真2)

【向かって右】
奥村 徳四郎 氏
【中央】
奥村 喜久雄 氏
(奥村 徳四郎 氏 長男) 医師
【向かって左】
高島 幸七 氏
(奥村 徳四郎 氏 実弟)
高島義肢製作所<福岡>

(写真1)は昭和10年頃の合資会社奥村濟世館の総会時の記念写真であるが、そこには当時の奥村一族、及び濟世館の主な従業員の顔ぶれがほぼ揃っている。初代奥村芳松はすでに死亡しており、不在であるが、最前列の子供4人の右側にいる成人男子は2代目館主婿養子奥村徳四郎、その右初代館主奥村芳松夫人シズ、その右は徳四郎夫人キヨである。尚、徳四郎の左隣に子供と共に写っている人は芳松次男で第3代目館主となる奥村廉二郎であり、その左は奥村哲三郎

(医師で阪大第一外科勤務の後開業)である。岡山濟世館の橋本氏、舟木氏、金沢濟世館の木藪氏の顔も見られる。尚、奥村シズは筆者の祖父、土井徳松の姉にあたる。

奥村芳松は、又、町の発明家でもあり蓄音機やたばこ自動販売機等多くの発明研究を行ったが、いずれも未完成に終わり成功したものはないが、本業においてはゴム加工に独特の技術を有し、義肢・義耳・義鼻等を商品化したことでも知られる。

奥村濟世館の2代目奥村徳四郎(旧姓高島。奥村家の婿養子。)は、高等教育を受けていなかったが独学でドイツ語をマスターし、第1次世界大戦後ドイツで出版された義肢装具学に関する書籍を読破し、極めて豊富な知識を持ち同時に義肢装具業界のありかたについても独特の見識をもっていた(写真2)。

昭和22年4月、第2次世界大戦直後、当時の日本義肢工業会(日本義肢協会の前身)総会で発表され、後に刊行された「日本義肢工業会事業計画単見」(写真3)では、当時の義肢装具が粗製乱造で極めて品質が低下していることを指摘し、欧米先進国では戦争によって



(写真3)

義肢装具の進歩発達が著しいのに、日本では反対に品質低下に至っていることをなげき、その理由の一つとして日本に義肢学の存在しないことをあげている。又、第2次世界大戦中に日本でも多数の権威者を集めて義肢の研究に尽力したが、当事者達の自画自賛にも拘らず、開発された義肢は先進国のものと比較すると大きな遜色があることを鋭く指摘し、その一例として大腿義足の膝遊動義足の筋金の欠陥性を示している。このような状況から脱却して日本の義肢装具のレベルアップを計るため次のような提案をしている。(文献2)

①検定制度の設定

これは現在の資格制度のことであり、医師・看護婦は勿論、人体を扱う職業は理髪師に至るまで資格検定制度があるのに、義肢装具に関しては何もないうまま放置されている現状を憂い、3ヶ月乃至6ヶ月の講習で義肢学と装具学一般を教え、終了者に資格を与えることを提案している。

②監査部設置

義肢装具製作施設の製品・資材・工具・工作法等を監査して優秀なものを表彰するようなことをすれば、製品の品質が向上する筈である。

③調査部設置

先進国の状況を調査して優秀なものは見本を取り寄せ研究材料と

④研究部設置

研究課題を設けて、会員中の適当な者に委託して研究させ、総会でその成果を発表させれば会員の啓発になる。

⑤図書部の設置

内外の義肢装具学に関する図書を集めて会員の閲覧に供す。

⑥業務助成

税務・労務・簿記など事務部門の業務について協会が指導助成をして協会員をサポートする。

⑦機関紙の刊行

40数年前に、これだけの計画案を持っていた先輩の存在は全く驚異であると言う他はない。当時、この奥村徳四郎の提案は協会ですべて無視され、義肢装具士の資格制度が実現するのは40年後の昭和62年の義肢装具士法の成立まで待たねばならぬこととなった。

<参考文献>

- (1) 初山泰弘「義肢装具士の将来像」
義肢研究会会報No.23, 1983.2
- (2) 社団法人日本義肢協会「わが国の義肢業界の歩み」
1992.11

<謝辞>

本稿執筆にあたり、ご多忙中にも拘らず色々と資料を提供して頂いた岡山の橋本義肢製作株式会社の橋本泰典社長、林和弘専務、竹内清事務長、また、金沢の株式会社濟世館の山田清一会長、土井義肢製作所の土井勝太郎会長、奈良市在住の奥村基子様、村中喜子様にも厚くお礼申し上げます。